第 32 回 武蔵野文学賞「高校生部門」 土岐善麿短歌賞

選考委員：林あまり・河路由佳・横山未来子・寺井龍哉

■一首単独の部

【最優秀】

退職後のスモーキングじいちゃんは俺たちよりも生き生きしてる

関 真誠

「スモーキングおじいちゃん」ということばの楽しさ！ぶっちぎりのインパクトで、最初からイチオシでした。煙草をくわえてゴキゲンなおじいちゃんが目に浮かびます。

E テレの「みんなのうた」で曲をつけてほしいくらいですが、いま喫煙ものはテレビで取り上げてくれないでしょうね。でも短歌はまったく自由です！

この一首の、目立たないけれど大事なポイントは「俺たち」の「たち」です。「俺」だけでなく、若者全般という意味合いがよく出ています。自分たちよりいきいきしているシニア世代に目を向けて、広い視野で日常を捉えています。(林)

「スモーキングじいちゃん」という言葉がまず目を引きまします。タバコ好きのおじいさんを非難がましき抜きで、粋なアニメの登場人物のような味わいで描き出すのに成功しました。上の句、5・7・5のところ、6・6・5とリズムを崩し下の句を定型で納めているのも面白く、記憶に残ります。加えて、世代を超えた信頼関係が感じられること、また高齢化社会の現実を切りとって含みのあることが、軽い読みぶりのこの作品に奥行きを与えています。

歴史人口学者ピーター・ラスレットの人生の四区分説では、一つ目は親の元にあって社会に出るまで、二つ目は、いわゆる現役世代、三つ目が退職後の元気な時代、四つ目が、衰弱の時代ということで、いま三つ目の「サードエイジ」が自己実現の時代として注目されています。「生き生きしてる」じいちゃんはその典型といえそうですが、孫世代の高校生からの「俺たちよりも」に含蓄があります。高校生が自分たちを彼らほど「生き生き」していないと感じるとしたら、その社会は健全と言えるのか。そんな問いかけが読後に残ります。(河路)

「スモーキングじいちゃん」というフレーズのインパクトに惹きつけられる。好きな煙草を吸って気ままに過ごしている「じいちゃん」がとても魅力的に描かれ、「じいちゃん」という呼び方にも親しみが感じられる。若い「俺たち」よりもじいちゃんの方が「生き生きしてる」と感じている点に現代の若者の大変さにもじませつつ、勢いとユーモアが魅力の一首。(横山)

仕事から身を引き、ゆったりと煙草を吸っている老人たちの様子が目に浮かぶ。「煙草をくゆらす老人たち」などと言ってもよさそうなのに、「スモーキングじいちゃん」とは。「スモーキング」によって、常に煙草を手放さず、常に煙を漂わせているような、エネルギーで謎めいた老人

の姿が浮かんでくるようだ。この「じいちゃん」が、今の「俺たち」と同じくらいの年代の頃は、どんな様子だったんだろう？なんでこんなに「生き生きしてる」のだろう？世代論の根本の、もっとも素朴な部分をつかみとった一首として魅力的。(寺井)

【優秀】

十七歳、終わりのZと呼ばれても世界を変える予定を立てる 山田 あすか

「Z世代」って、考えてみれば失礼な呼び方ですよ。そう言われる当事者が、怒りを返すのではなく、こんなステキな決意を返す。素晴らしいです！「世界を変える」は、革命のような大きな意味にも、庭に花を植えるような身近な意味にも取れます。そこがまたいい。(林)

下の句の「世界を変える予定を立てる」という表現に注目しました。未来に向けて世界を変えていこうという沸々とした思いを抱きつつ、まずはその「予定を立てる」。高校生ならではの可能性の大きさを思わせてくれます。ただ第二句の「終わりのZ」の解釈には迷いました。Z世代のなかでも高校生は年少ということ、「Z」がアルファベットの最後の文字であること、などを思いましたが、別の何かからの引用かもしれません。ここに課題があると言え言えませんが、「十七歳」からの未来の世界に対する「予定」の言挙げには、それを超える力があると思えます。(河路)

いわゆる「Z世代」と呼ばれる年齢の〈われ〉。アルファベットの最後の文字である「Z」にはイメージ的にやや閉塞感があるだろう。それをくつがえすように「世界を変える予定を立てる」と大きな志を表現した点に若々しい自負がある。(横山)

終末の予感に襲われながらも、未来への希望を捨てず前向きに歩いてゆこうとする、その気高さに惹かれる。今すぐに「世界を変える」のではなく、あくまでもその「予定を立てる」のだ。世界に「終わり」が来てしまったら、その「予定」を実行することはできないはずだが、そんなことにくよくよ悩むことはない。三分後、一時間後、三日後、一週間後、一年後…、未来にひろがる時間の「予定」を立てることの素晴らしさにも気づかせてくれる。(寺井)

【佳作】

オレンジが溶け出たような影になりコートに呼吸している身体 荻原 咲

上の句の比喩が魅力的です。「コート」は外套ではなく、スポーツの試合場。地面がオレンジ色のものもあります。オレンジが溶け出したような呼吸している自分の影を見ている。呼吸している実際の自分をおいて、自分の命を俯瞰するように影を見ている視点もおもしろいと思います。(河路)

作中主体がテニスのクレーコートで試合をしている場面を想像した。「オレンジが溶け出たような影」から強い夏の日差しと赤茶色をしたテニスコートが目浮かぶ。試合の合間に「呼吸して

いる身体」の影を自分で見つめているひと時だろうか。静寂の中で呼吸音だけが聞こえるような緊迫感が伝わって来た。(横山)

星よりも、チャリのライトがあかるいしわたしがわたしを産んだんだった 栗橋 唯

まさに口語的な発想、口語の詩を感じさせます。ふだんから現代詩や短歌をよく読んでいるかたなのかな、と思いました。「あかるいし」が特徴的。(林)

遠い星の光よりも、身近な「チャリ」のライトが自分の進む道を照らしてくれているという感覚だろう。「わたしがわたしを産んだんだった」という今の自分をまるごと受け止めようとする言葉が力強い。(横山)

学校の白いカーテンに包まれて花嫁みたいと笑った放課後 神山 蓮

映画のワンシーンのよう。これはぜひ昔の蒼井優に演じてほしい(笑)。「笑った」という過去形が切なく胸に響きます。きのうのことなのか一年前なのかわからないけれど、それも含めて切なくてステキ。甘くなりすぎず、さらっとしているのもいい。事実だけで、よけいな心情表現がないからですね。(林)

「花嫁」という古風なことばに不意を突かれます。結婚が非現実的な物語のように思える小学生のころの思い出かもしれません。白いカーテンをふわっとまとして屈託なく遊んでいる無邪気な少女たちの危うさが、印象に残る一首です。(河路)

早朝の富士山登る父の背に注ぐ来光町に零れる 竹鼻 久音

夜を通して富士登山をしたのでしょう。前に行くお父さんの背に朝の太陽の光＝ご来光が差し神々しく見える。その陽の光がそのあと下の町に落ちて広がるようで「零れる」という動詞を使ったものと思います。陽光と父の背中、どちらにも全幅の信頼が寄せられていて爽やかです。(河路)

「父」とともに富士山に登っている場面だろう。父の背後から注ぐ朝日が麓の「町に零れる」と表現したところに、山上に立っている臨場感がある。目の前の自然の光景をていねいに言葉で捉えようとする意欲を感じた。(横山)

しばらくは炭酸だけを飲んでいよう全てが水の泡になるように 根本 権

忘れてしまいたいことを水に泡になれ、と言っているようです。それには少し時間がかかるからその間、「しばらくは」泡の出る炭酸飲料を飲んで願掛けをするということでしょう。気分はよ

くわかりました。ただ、「水の泡になる」という慣用表現は、努力が報われず無駄になる意味で使いますから、本来の意味で下の句だけを読むと、他者への呪いのようにとれてしまいます。(河路)

「全てが水の泡になる」は、すべてが水泡に帰すということで、絶望的な状況にも見えるけれど、嫌な記憶を捨て去って次に向かうための、すがすがしい出来事でもあるようだ。自分の身体のなかに詰まった嫌なものを、時間をかけて、すべて水の泡にしてしまおうという決意は、自分の心を守るための確実な方法なのだろう。刺激を求めて「炭酸」を飲むのではなく、自分を浄化するため、過去を消し去るため、という発想の新しさにも注目した。(寺井)

サラダバーすべてがいれかわるとしてきみはいつまできみなんだろう 安田 湖夏

サラダバーのすべてが入れ替わるのは、その日のうち。体の細胞が入れ替わるのはもっと時間がかかりますね。細胞が入れ替わったらきみはいまのきみと違うのか。体のことじゃなく、もちろん心のことなんでしょう。自分が置いていかれそうな不安が表れています。(林)

下の句で、目の前の「きみ」がいつか変わってしまうのではないかというおそれが吐露されます。上の句には「サラダバー」。それぞれ異なる野菜の入った容器は、数種類ずつ季節や流行に応じて変わったりして、結果的にすっかり入れ替わることもあるようです。序詞のような上の句にサラダバーをもってきたのは、瑞々しい野菜のイメージも重なって効果的です。(河路)

なみだのみ冬のえくぼにみずたまる春に芽吹くはあなたとの夢 山本 蒼太郎

冬のひととき、涙だけがえくぼに流れて、水がたまる。口元は笑っているのに、涙が出ているのだ。その水から、春になると芽が出て、あなたと一緒に過ごす、夢のイメージがひろがる。言葉がなめらかでなく、読み解くのが難しい歌だったが、こんなふうに解釈してみた。失恋や別れのときの、泣き笑いの表情と、それでもこれからの春に期待を寄せる姿が、不思議に入りまじっている。言葉を整えることも必要だが、混濁したイメージをつかまえる姿勢はこれからも大切にしてほしい。(寺井)

■連作の部

【最優秀】

「知らない舟を漕いでいく」 縄田 安生

・ 幸せになれるようにとつぶやいて知らない舟を漕いでいく今日

なんと心にしみる歌でしょう。高校生という若さの歌でもありながら、老年の者もこのように思います。普遍性をしっかりと持った作品です。

・ 駅のホーム電車がきますのアナウンスが死んでもいいよに聞こえる日もある

「聞こえる日もある」が絶妙です。毎日そうなわけじゃなくて、そういう日もある、と。

連作全体に「死」の字が多く、けれどそれほど暗いわけではなく、淡々としているところがリアルです。美しいことばのセンスと、冷徹に自らをみつめる鋭さの両方を、さらに磨いていってくださいね。(林)

表題は〈幸せになれるようにとつぶやいて知らない舟を漕いでいく今日〉からとられています。自分が命を預けて漕いでいる船が「知らない舟」ということばは個性的で、舟の出自や属性、行先を知らないのかどうか、大きな不安、ころもとなさが伝わります。18首よりなる連作の全体を貫いているのは、ひんやりとした不安、危うい感覚です。「死」という言葉が4首に現れますが、中で〈死なぬまま愛されることはできるのかゴッホのひまわりは今日も咲いてる〉は目を引きまします。亡くなってから名声があがったと言われるゴッホが売れない時代に描いた力強いひまわりはいまも生き生きと咲いています。上の句は、反語として「いや、死なずに愛されることは不可能だ」ととるのか、ストレートに「死なずに愛されることは可能ではないか」ととるのか。「死なぬまま愛される」という表現に独自性があります。このような作品がもっとあればよかったと思います。(河路)

ひりひりとした傷つきやすい心や漠然とした不安感などが伝わり、ひとりの若者の等身大の姿が立ちあがる。「キャラメルを前歯の裏にくっつけて自己愛が私を溶かしてく午後」は、上句の触覚・味覚の表現から下句への展開が巧みだ。「いつだって嘘をついてる間違っても私を外に出さないように」は、本当の自分を出さないように常に「嘘」で鎧っているという複雑な思いがうたわれており、心に残った。(横山)

どこかへ行ってしまいたい、消えてなくなりたい、という思いを抱えながら、心のなかや外の世界を見つめる一連。「いつまでもそのままいてねの裏にある添加物まみれの優しさのこと。」「楽しくもないのに楽しい！って言いすぎてオオカミが来ても気づけなかった」は、自分の心も相手の心も、深いところまで見えてしまうがゆえの苦しさを感じさせる。「中学の同級生のスカートが会う度短くなって寂しい」は、かつての友人が遠い世界に行ってしまうような感覚だろう。スカートの長さが変わっただけ、でもそれは、もう戻らない決定的な変化なのだ。「寂しい」という直接的な表現が、本当にさびしい。(寺井)

【優秀】

「夏季限定幸福論」

野村 梨乃

ことばが雷のようにぴかっと光る、特別な魅力のある作者です。

「ばかとおい冬」「飛び降り自殺する雨」「とめはねはらいきれいに」「昨日落ちてたマスコット 今日はいないね」など、ゾクゾクします。

- ・何年もこどもが乗っていないブランコに座るわたしをこどもが見ていた

この歌が飛び抜けて素晴らしい。構図がきちんと描かれた、誰も手が出せない世界です。(林)

口語自由律を基本とする17首による連作。11首目の〈火葬場が嫌いだいまも〉など、大切な人を失った痛みが伝わりました。「ママ」「おとうと」が登場し、家族の物語が浮かびました。〈カーテンの隙間からこぼれる隣家の灯りずっと異世界だった〉〈蝉のぬけがらを親指で潰す 天から飛び降り自殺する雨〉〈何年もこどもが乗っていないブランコに座るわたしをこどもが見ていた〉〈夏 夏 夏 とめはねはらいきれいに 後悔なんてしないように〉など、口語自由律を自分のものとして、日常を異化する手際が鮮やかで、才気を感じさせます。(河路)

移ろいゆく時間や人恋しさなどが、多彩なイメージによって詩的に描かれている。「カーテンの隙間からこぼれる隣家の灯りずっと異世界だった」のぬくもりへの希求、「通学路に昨日落ちてたマスコット 今日はいないねはッピーえんど」のやさしさとかすかな寂しさなど、繊細な感情を表現した作品に惹かれた。リズムの取りづらい歌があったのがやや惜しいと感じた。(横山)

短いフレーズで確実に読者の心をつかむ、その手つきがとても鮮やか。「七月のばかとおい冬 共テまで残り何日？毎日たずねる」の「ばか」は「とおい」の程度を強調する言葉だが、自分を取り巻く環境全体への憎しみのようにも感じられる。「通学路に昨日落ちてたマスコット 今日はいないねはッピーえんど」の突き放したような明るさにも通じる。「カーテンの隙間からこぼれる隣家の灯りずっと異世界だった」の「異世界」は、メルヘンの世界ととってもいいし、私には知りえない隔絶された世界ととってもいいが、日常に忍び込む違和感を絶妙にとらえている。(寺井)

【佳作】

「小さな宴」

岡村 奏汰

友人との「宴」のために食材を買ったり料理をしたりする場面を、ユーモアを交えて生き生きと詠んだ一連。「朝日が味噌汁に差し込んでいた豆腐だと勘違いしたまますすった」「行ってきますと一言時一人ただ一人雨外套はかけたまんまで」のような映像が見える歌にも惹かれた。(横山)

食べ物や調理に関する語が点々と配されて、朝から夜、そして翌朝へと続く時間の流れもすんなりと受け取れる一連だった。「真鯛の眼引きよせられるほど立派高いのか安いのかわからんな」の下句のだらだらと続く心地よさ、「目覚めたらスマホの画面にうつってた知らない漫画おもしろ

い なんて？」は、目が覚めたときの朦朧とした感じ、眩しさがたしかに伝わってくる。もう少し心の中に踏みこんでほしかった。(寺井)

「ひかりとは例えば」 川上 真央

10首の連作で、最初の2首と最後の1首で、飼っていた小鳥が死んだ悲しみの中から生まれた作品だと思いました。〈空も風も知らず私の手のひらを君は優しい堤防にした〉〈触れられて目覚める朝ひかりとは例えば君の嘴のこと〉など、手乗りの小鳥との生活が愛情深く丁寧に描かれていて魅力的です。残念なのは〈サキサキとセロリ噛みいて幼鳥は小さな音楽家となってゆく〉の初句と第2句が、広く知られている佐佐木幸綱の作品と同一であることです。本歌取りという手法はありますが、借用する歌句は本歌とは異なる位置に置くことが原則(藤原定家の『詠歌大概』など)で、この作品は、本歌取りとして成功しているとは言えません。三句以下がよいだけに残念です。(河路)

「空も風も知らず私の手のひらを君は優しい堤防にした」「触れられて目覚める朝(あした)ひかりとは例えば君の嘴のこと」などの小鳥との深い繋がりをうたった作にせつなくなるほどのやさしさがある。定型と言葉を大切に、現代短歌の先行作品にもよく親しんでいることが分かる完成度の高い一連。四首目で本歌取りに挑戦した意欲は買いたい。が、二句目までが本歌と全く同じというのは気になるころだった。(横山)

「手つなぎハート」 近藤 翼

〈真夜中の秘密の逢瀬電子上 LINEのハモリ小さな喜び〉〈ガラス窓の中姿見代わりに五度見する両耳イヤホン音量ゼロで〉〈灰コートタートルネックにジーパンで あなた好みの僕でいますか?〉など、恋する高校生の気分がリアルに伝わってくる作品群です。題名は〈変化する僕の思いは隠してる スマホ壁紙手つなぎハート〉からとられていて、人と人との優しい交流を意味するイラストのようです。瑞々しさが魅力ですが、10首すべてが三句切れ、うち4首の結句に〈恋の終わりで〉〈音量ゼロで〉〈ポーカフェイスで〉〈ジョブチェンジして〉と似た言いさしが使われるなど、技巧的に単調なのが課題です。(河路)

弱気な恋の思いを、ポップな語彙を配してうたった一連として読んだ。「ガラス窓の中姿見代わりに五度見する 両耳イヤホン音量ゼロで」は初句「ガラス窓の中」の字余りが、窓に映った姿を凝視するような視線を感じさせる。「目を合わせラブのビームを連打する やぶれかぶれのポーカフェイスで」の勢いも心地よい。目をひく名詞が多用されていて、それはそれで魅力的なのですが、もう少し言葉の流れで読ませてほしかったと感じた。(寺井)

「よく眠る」 西川 さくら

・涙目でこらえたものを入れるのは花のすきまのブラックホール

この歌、いいですね。出来上がったとき、なにかをつかまえた実感があったのでは。どの歌も、あともう少し粘って、深くつかまえに行きましょう。(林)

〈かあさんの髪を触って寝たときのひんやり感が忘れられない〉からは、その意外な冷たさが強く印象付けられます。〈ベッドでは暴力的なひかりだしブルーなんだしなのに浴びたい〉〈生命を赤く巻かれて耳元がくすぐったいのピアス開けてよ〉など、感覚的な表現に長けた10首で構成されています。題名の「よく眠る」は、作品の中には見いだせません。全体が、ぐっすり眠っている時の夢かもしれない、と思える不思議な題名です。(河路)

「約束してね」 安田 湖夏

・ねるねるねる地球ねるねる覆うねるまでねるねるする約束してね

オリジナリティがあり、しかも強い。こうした歌をどんどんつくってください。よくある言い方で妥協しないで、これだ、というところまで考えて。(林)

恋する思いの熱さを感じさせる作品が個性的。「スピネルという石がありスピネルを知るの絶対わたしたちだけ」「きみが笑うそれだけがすべて逆さまに靴が転がるためのイカサマ」「もてあそぶ携帯どんどんあつくなるわたしもあついままでいたいよ」などのリフレインや言葉遊びを用いた表現に独特な勢いを感じた。(横山)